

Case Study

支部ケース・スタディ

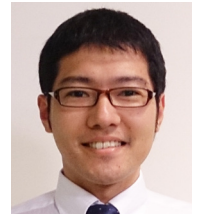
信越支部

JCV東京情報センターを拠点にした 地域商社事業

上越ケーブルビジョン(株)

メディアセンター

佐藤 康司



今年11月で開局36年

上越ケーブルビジョン(以下JCV)は今年11月に開局36年を迎えます。新潟県南西部に位置する上越市と妙高市に続き、今年から十日町市を事業エリアに追加しケーブルテレビ事業を展開しています。テレビ、FMラジオ、インターネット配信等、自社媒体を通じて情報をワンソースマルチユースで発信し続けることで、幅広く「JCV」のサービスを利用いただいています。

近年は東京に拠点を開設しB to CからB to Bへ、上越妙高地域の産品を首都圏から全国に広める地域商社事業をスタートさせるとともに、情報に付加価値をプラスする新たな情報産業としての成長を目指しています。

地域商社事業の拠点 東京情報センター開設

JR有楽町駅の目の前にある複合商業施設「東京交通会館」。この4階に上越妙高地域と東京を結ぶ情報の受発信拠点「JCV東京情報センター」を2017年の夏に開設しました。オフィススペースや商談スペースが備わっているほか、上越妙高の特産品を常設展示し、地元産品やイベントなどの情報発信の場となっています。

ここを拠点に同年10月にスタートさせたのが「雪国マルシェ」です。絶え間なく人が行き交う東京交通会館1階のピロティーでは、毎週末に生産者が対面販売する「マルシェ」が開かれ、全国各地から集められた特産品が販売され賑わいます。JCVはここにブースを出店し、上越妙高地域周辺の特産品を首都圏の人に購入して食べてもらい、商品の魅力を広くPRする取り組みを開始しました。知名度の低い上越市や妙高市だからこそ、発信力のある東京との太い繋がりが求められていました。「雪国マルシェ」は商品の知名度アップ、ファン獲得、販路拡大と地元企業のビジネスチャンスを広げる役割を担っています。



JR有楽町駅前の複合商業施設「東京交通会館」



雪国マルシェ

コロナ禍で開催中止を余儀なくされた期間もありましたが、月1回のペースで、今年4月までに67回開催し、上越市、妙高市、十日町市、佐渡市など110社以上の商品を取り扱いました。参加した企業は、対面販売で

訪れた人に商品の特徴やこだわりを説明し、試食してもらうことで雪国に育まれた唯一無二のおいしさ、商品の魅力を伝えています。

会場では販売するだけでなくアンケートをとり、ユーザーの傾向など集めたデータを地元企業にフィードバックすることにより、販路拡大をサポートするマーケティング支援も行っています。このマルシェの開催が、地域商社としての第一歩となり、次のステージへの足掛かりとなっています。

アンテナショップの聖地に「雪國商店」オープン

東京有楽町でのマルシェ開催から3年が経過した2020年9月、東京交通会館の1階の商業ゾーンに地元の特産品を販売する常設店舗「雪國商店」をオープンしました。ここは、北は北海道から南は九州まで、日本各地の特産品が集まるアンテナショップの聖地です。この一角に店舗を構え、上越市、妙高市に加え、佐渡市の商品を販売・発信する事業をスタートさせました。米、酒、地ビール、味噌、発酵調味料……。ここで取り扱う商品は知名度の高いものばかりではなく、地元で愛されながらも全国では知名度の低い商品も数多くあります。「雪國商店」では個々の商品のPRを後押しし、商店を通じてファンをつくり、全国へと広めるきっかけをつくる一翼を担っています。これまでに100社を超える約800品が店頭に並びました。2021年12月には時代のニーズにあわせてECサイトも立ち上げました。

常設店開設の背景には、月1回のマルシェ開催だけでは地元企業の要望に応えきれない実情がありました。マルシェは首都圏で製品をPRし、都会のニーズをつかむ貴重な場として、年々参加企業が増えていました。しかし屋外開催による制約のほか、月1回という制限から順番待ちとなり、希望時期に参加できないケースも度々ありました。こうした状況を解消しようと、常設店舗の運営に踏み切りました。「雪國商店」にはマルシェで取り扱う4～5倍の商品、最大で300品ほどが並びます。冷蔵ケースなど衛生設備も完備し、これまで取り扱えなかった生鮮食品なども販売できるようになりました。現在は商機を適宜見定め、商品を入れ替えながらラインナップの充実を図っています。

またケーブルテレビ会社の強みである取材力や動画制作力を発揮し、商品の開発秘話や製造の裏側を紹介する番組を制作し、YouTubeを活用して商品を広く世界に向けて発信する取り組みも行っています。

地元企業には「雪國商店」は「上越妙高地域の一部」だと思っていただき、この絶好のPRの場を気軽に活用していただきたいと考えています。店頭に並んだ商品の中には、反響が反響を呼び、商品が即完売となったうれしいケースも少なくありません。

故郷を懐かしんで足を運ぶ人はもちろん、この店が上越妙高を知るきっかけになり、「雪國商店」のリピーターとなったファンも増えています。



雪國商店

地元と東京を映像でつなぐ 東京にスタジオ開設

東京情報センターの機能はマルシェ開催や商店運営の拠点だけにとどまりません。2021年7月に東京スタジオを開設しました。本社と東京情報センターを光専用線で結び、東京スタジオからコミチャンへの番組出演が可能になりました。実際に東京スタジオから首都圏在住のアナウンサーが遠隔で出演し、ニュースの原稿を読んだり、ラジオのパーソナリティーを務めたりしています。また、このスタジオは災害時のバックアップ機能も有し、上越の本社スタジオの代替機能として非常時の情報発信の備えとなっています。

スタジオ開設の背景には、地方が抱えている人材不足の問題もありました。特に特殊な業務にあたるアナウンサーやタレントは、地方へ行くほど不足しています。一方、首都圏には、メディアへの出演機会を求める人たちが集中し、人材が尽きることはありません。東京にスタジオを開設したことで、不足していた業務への人材マッチングが可能となり、相互利益の関係が構築されました。

また東京情報センターは編集機能も備えています。在京のスタッフが首都圏で活躍する郷土出身者を取り上げた番組を数多く制作し、コミチャンで放送してきました。地元だけに留まっていたのでは作れない、新しい切り口での番組づくりがスタートし、これまでになかった視点の番組が視聴者に喜ばれています。

地方を離れた人たちは人一倍「郷土愛」が強い傾向が見られ、地元へ貢献したいという思いを強く抱いています。引き続き、地元へゆかりのある首都圏在住者となつながら、都内を中心に活動する地元出身者の活躍などを、テレビやラジオを通して地元へ伝えていきたいと考えています。



東京情報センターに2021年7月に開設した「東京スタジオ」

東京事務所の開設、「雪国マルシェ」の定期開催、「雪国商店」の常設運営と、JCVはケーブルテレビ事業に続き、地域商社としての取り組みをスタートさせています。東京情報センターが地元と東京を結ぶ太いパイプとなり、地元企業をサポートする役割を果たし始めています。

今後も雪国ならではの情報と産品を発信する機能を高め、「情報による地域商社」を進めていきます。